徽州商人と明末清初の芸術市場

——呉其貞『書画記』を中心に——

井上充幸

【要約】明末清初の江南において、書画骨董の蒐集と鑑賞は中国史上空前の活況を呈し、同時に芸術作品の商業化が進展した。本稿は、呉其貞『書画記』の記述に即して、当時の書画骨董の流通を担った徽州商人の活動を明らかにし、あわせて中国の芸術市場の動向について考察した。明末の徽州は、書画骨董取引の一大中心地であった。呉其貞とその一族をはじめとする徽州商人たちは、同姓の一族同士の、あるいは取引を委託された使用人たち同士の結びつきをその活動の基盤として、江南一帯を股にかけて組織的に書画骨董の売買に勤しんだ。清の時代以降、呉其貞は江南各地の主要都市を巡り、在地のコレクターや商人たちと幅広く交遊する中で、一流の目利き・指南役として遇された。この頃、専門技能を持つ商人・職人たちの中には、文人たちと対等の関係を取り結ぶ者も現れ、彼らの地位は以前に比べて向上した。しかし一方で、北京が書画骨董の蒐集・鑑賞活動の中心地として再浮上し始め、江南の優位性が相対的に低下することにより、商人たちの活動は一旦終息に向かうこととなった。

史林　八七巻四号　二〇〇四年七月

はじめに

中国における書画骨董の蒐集と鑑賞は、一六世紀から一七世紀にかけて、空前の大流行を見ることとなる。一種の社会現象ともいえるこのブームを担ったのは、主に城市の住民、すなわち「市民」たちである。[1] 伝統的な文化の担い手たる士

大夫・文人はもちろん、当時の社会と文化に影響を及ぼした生員や山人などの下層知識人[2]、折からの好景気に伴い急速に経済力と社会的地位を身につけた富裕な商人、こうした様々な階層の人々がこぞって書画骨董に熱中し、そのコレクションの量と質を競い合ったのである。かかる中国史上かつてない状況を背景に、書画骨董に対する需要は急増し、やがて市場が形成され始める。とりわけ、流行の中心地であった蘇州をはじめとする江南デルタ地帯の各都市においては、投機的な売買が盛んに行われ、大量の書画骨董が市場に流通することとなる。

本来、士大夫・文人の独壇場であったはずの「文房清玩趣味」が、書画骨董の「商業化」に伴い否応なく変質していった様について、筆者はさきに、嘉興在住の文人、李日華が書き残した『味水軒日記』を取り上げて論じた[3]。書画骨董に限らず、明代の文化全般における江南優位の状況について、歴史学の立場から明快な図式を提示したのが宮崎市定である[4]。これは後に中砂明徳によって更に敷衍され、とりわけ第一章「趣味の市場」では、南宋から元、そして明末に至る間に、江南が中国美術全般にわたる主導的地位を獲得していく過程が、董其昌を軸に論じられている[5]。中でも重要なのは、在野での書画骨董ブームが、商業化と密接な関係を有していたことを、明快に提示した点にある。また近年、書画骨董の「商業化」というテーマに関して、注目すべき論考がこのほかにも次々と発表されている[6]。

この時代、江南における書画骨董ブームと価格の高騰について、その元凶と目されたのは徽州商人であった。このことについては、王世貞と沈徳符によって批判的に述べられていることでよく知られ[7]、中砂明徳によって「蘇州での流行形成→江南全体に波及→金になると踏んだ新安商人による流行商品の買い漁り→「耳食」（耳学問）の彼らに物の善し悪しなどわかろうはずもなく、市場に偽物があふれかえる、という図式」が示されているとおりである[8]。

族譜や契約文書などの史料を中心に進められてきた徽商研究においては、書画骨董のような奢侈品の取引については、具体的に窺うことが困難であった。一方の美術史方面においても、明末清初のいわゆる「黄山派」と呼ばれる地方画壇の形成と発展を論述する際に、副次的に述べられる程度である。しかし、徽州商人と当時の書画骨董市場との関わりをつぶ

さに見ていくと、単なる成金趣味・奢侈風潮という理解だけではすまされない、もっと重大な影響を及ぼしていたことが判明する。

では、当時文人たちからしばしば揶揄され、あまり評判の芳しくない彼らが、具体的にどのような活動をしていたのだろうか。そのことを知る上で好個の資料となるのが、明末清初に活躍した徽州の画商、呉其貞が著した書画録、『書画記』六巻である。商人ならではの視点とフットワークの軽さ、交際範囲や情報網の広さなどとあいまって、この書物は、同時代の他の書画録には見られない独自性に満ちており、明末清初の江南各地のコレクションの動向について、他の史料からは得がたい情報を数多く含んでいる。

本稿では、この『書画記』をもとに呉其貞の足跡を追い、明末清初の商人たちが書画骨董の世界において果たした役割について検証し、これを通じて当時の芸術市場の大きな動向について論じていくこととする。

① 宮崎法子「明代の絵画」(『世界美術大全集』東洋編第八巻「明」、小学館、一九九九年)

② 金文京「中国近世における知識人の性格——明代の山人を手がかりとして——」(『中国史学』第七巻、一九九七年)

③ 井上充幸「明末の文人李日華の趣味生活——『味水軒日記』を中心に——」(『東洋史研究』第五九巻第一号、二〇〇〇年)

④ 宮崎市定「明代蘇松地方の士大夫と民衆」(『宮崎市定全集』一三「明清」、岩波書店、一九九二年)

⑤ 中砂明徳『江南——中国文雅の源流——』(講談社選書メチエ二五〇、二〇〇二年)

⑥ 主なものとしては、沈振輝「明代民間収蔵品市場和蔵品買売」(『学術月刊』一九九九年第四期)、楊新「明人図絵的好古之風与古物市場」(『文物』一九九七年第四期)、増田知之「明代における法帖の刊行と蘇州文氏一族」(『東洋史研究』第六二巻第一号、二〇〇三年)、澤田雅弘「潤例の発生と展開——明・清における文人売芸家の自立——」(『書学書道史研究』第七号、一九九七年)、Craig Clunas, *Superfluous Things: Material Culture and Social Status in Early Modern China*, Polity Press, 1991; Timothy Brook, *The Confusions of Pleasure: Commerce and Culture in Ming China*, University of California Press, 1999 などが挙げられる。

⑦ 王世貞『觚不觚録』・沈德符『万暦野獲編』巻二六「玩具」時玩

⑧ 前掲註⑤中砂明徳著書六二頁

第一章　呉其貞『書画記』について

呉其貞に関する伝記史料は少なく、管見の限り手がかりとなるのは、巻首の「提要」及び『書画記』に断片的に記された内容がほとんど全てといってよい。以下、『書画記』の各種影印本・排印本に附された解題を援用しつつ、呉其貞と彼の著書『書画記』について略述する。

呉其貞は、字は公一、徽州の人である。元の黄公望《富春山居図》残巻（一名《剰山図》）に附された王廷賓の跋語によれば、寄谷と号したという。[1] 生年は万暦三四年（一六〇六）[2]、正確な没年は不明だが、『書画記』の記述は康熙一六年（一六七七）一二月六日、当年七一歳の時点で終わっており（巻六「王斉翰淵明図絹画一小幅」。以下、本文中での『書画記』の引用は、巻数と作品名のみを示す）、おそらくこの数年後に没したと思われる。明末清初の動乱の時代にあって、当時としてはかなりの長寿を全うした人物であった。彼はこの長い生涯に亘り「賞鑒に留心し、常に蘇州及び維揚に遊び、收藏家と相い往來し、多く書畫の眞蹟及び生平自ら購う所の者を觀、各おの品題を加え、隨手劄錄し、所見の年月を注明すること、四十餘歳の久しきを歴、因りて裒輯して成編を爲」り、[3] こうして残されたのが『書画記』六巻である。

『書画記』の来歴と記述の特徴については、すでに邵彦の「本書説明」によっておおむね尽くされているので、ここではそこで触れられていない事柄を中心に、ごく簡単に記すにとどめる。[4]

まず、著録される作品が、全て元の時代以前の書画であり、明代以降のものはいっさい排除されている点である。商売柄、彼は多くの明人の作品に接したはずであるが、これは彼自身の書画作品に対する価値観のあらわれであろう。[5] また、書画以外の「古玩」についても、基本的に明代の作品（陶磁器など）に触れることはない。

『書画記』は「前人の題跋に於いては原文を録さず、『珊瑚網』・『書畫彙考』諸書と體例を稍や異にす」ることも重要な特徴である。ここに挙げられた汪砢玉『珊瑚網』・卞永誉『書画彙考』は、いずれも『書画記』の前後に著された重要

な書画録であるが、それらの記述の大部分は前人の記した題跋の全文が占めており、考証研究には有用であっても、編著者自らがその作品についてどう評価したか（作品の善し悪しや真贋の判定など）については、判断停止してしまう場合がほとんどである。一方、「其の臚採は甚だ博く、行款の位置・方幅の大小・印記・紙絹・裝潢・卷軸に於いて、皆な一一備列し、其の眞贋を評隲すれば、辨論も亦た多く確切なり」とあるように、呉其貞の態度は、ペダントリーに堕することなく極めて直截明瞭であり、自らの鑑賞経験に対する自信のほどが伺える。この『書画記』は、博引旁証の大作である張丑の『真蹟日録』と比較して、その記述上の特徴は正反対であるが、鑑賞の的確さにおいては甲乙つけがたい内容となっているのである。

康熙から乾隆にかけては、この外にも注目すべき書画録が二点、相次いで登場している。一つは呉升『大観録』二〇巻であり、もう一つは安岐『墨縁彙観』六巻である。呉升は、字は子敏、蘇州の書画骨董商人であったとされる人物。『書画記』の中にもその名が現れるが（巻六「僧梵隆高僧図紙畫一卷」）、その生平については未詳である。安岐は、字は儀周、麓村・松泉老人と号した。彼は朝鮮の出身で、もともと納蘭成徳の家奴であったが、塩業で築き上げた巨万の富を元手に古玩を蒐集したと伝えられる。[6]

呉其貞・呉升・安岐はいずれも商人でありながら、王時敏・孫承沢・梁清標・宋犖ら清代前半期を代表する賞鑑家に重んぜられ、互いの蒐集に協力し合ったのみならず、同時代の他の書画録の欠を補うに足る、と称されるほど優れた内容の書画録を書き残した（余紹宋『書画書録解題』巻六「著録」四「鑒賞」）。これは中国の書画の歴史において、全くの異例に属する事態である。本来、士大夫たちからは低く見られていたはずの存在であった彼らが、なぜこの時期にこれほどのことをなしえたのであろうか。以下、呉其貞の記述をもとに詳しく検証していこう。

① 王廷贊については第五章第二節を見よ。現在、浙江省博物館に所蔵されるこの《富春山居図》は、火災で両断された画巻の前半部分に当たり、一時期呉其貞が入手して秘蔵、《剰山図》というネーミングも彼による（『書画記』巻三「黄大痴富春山図紙画一大卷」）。後半部分

は、現在台湾の故宮博物院に所蔵されている。

② 『書画記』巻五「趙松雪古木竹石図絹画一幅」には「時に丙午六月二日、余の六十の初度なり」とあり、この丙午は康熙五年（一六六六）のこと。

③ 『欽定四庫全書』子部八芸術類書画之属『書画記』提要。以下の引用文についても同じ。

④ 現在『書画記』の原本は存在せず、北京の故宮博物院所蔵の『四庫全書』所収本が、通行の諸本の底本となっている。乾隆年間に『書画記』は四庫館に献呈され、一旦は子部八芸術類書画之属に収められたものの、後に「語が違礙に渉る」ため禁書とされてしまった。そのため、清代以降に『書画記』を目にした者はほとんどなく、かの余紹宋でさえも『書画書録解題』において「未見類」に分類せざるを得なかった。幸いにも、北京の故宮博物院所蔵の『四庫全書』には『書画記』が残されており、これをもとに、上下二冊の影印本が、収録作品の目録と文字の校訂表を附して、一九六三年四月に上海人民美術出版社より出版され、広く世に知られることとなった。同じものは、『続修四庫全書』子部芸術類第一〇六六冊にも収められている（上海古籍出版社、一九九五年）。一方、排印本は『中国書画全書』第八冊（上海書画出版社、一九九四年）に収められ、二〇〇〇年一月には、邵彦による校点本が、遼寧教育出版社より『新世紀万有文庫』第四輯「伝統文化書系」の一冊として刊行されている。以下の記述および原文の引用は、原則として『四庫全書』本に基づいて行うこととする。

⑤ 『書画記』巻五「馬遠永宝長生図絹画一幅」に見る「時人」の画についてのコメントや、『書画記』巻四「趙善長秋水野航図小紙画一幅」に記された蘇州の蔡声璆の嗜好に対する評価などを参照。

⑥ 以上の安岐に関する情報は端方の序文による。後に葉徳輝はこの説に対して反駁を加えているが、いずれが事実かは定かではない。劉尚恒は、安岐に関する伝記史料を綜合して、彼を納蘭成徳の巨僕、安図の子の「安七」であり、旗籍に入った朝鮮人、としている。劉尚恒「安麓村事迹匯考」（『天津師大学報』一九九一年第四期）の「一　関于安麓村的身世」を参照。

第二章　明末の呉其貞とその一族

『書画記』の記述は、その内容から見て、巻一・巻二の前半部分と巻三以降の後半部分とに大別され、前半部分には明の崇禎八年（一六三五）前後から、年号を記さない乙酉（清の順治二年・一六四六）九月朔日までの記事が収められる。[1] ここからはまず、彼の前半生の事跡を追っていくこととしよう。

第一節　商山の呉氏について

呉其貞が郷里において本格的に書画の鑑賞と取引に携わり、日々の鑑賞記録を意識的に取り始めたのは、おそらく二十代後半からである。彼は怡春堂と名付けた書斎を構え（巻一「黄大癡臨江阻風図紙画一幅」）、自らのコレクションを蓄え始めるが、ここには自身の一族をはじめ、徽州の「巨姓大族」につらなる地元の名士やコレクターたち、彼らが所蔵する書画骨董の販売・蒐集を委託された使用人たち、江南の各地から徽州にやってくる商人たちに至るまで、様々な人物が訪れた。また、呉其貞のほうから彼らのもとに出向くこともしばしばであった。呉其貞にとって明の最末期の約一〇年間は、賞鑑家としての研鑽を積むための修行期間であったといえる。

「商山の呉氏」は、徽州の大族である呉氏の分派の一つで、徽州府の休寧県商山を本拠に、そこから歙県に至る各地に居住していた。呉其貞はその一員である。[2] 休寧県出身者には典当業を営む者が多かったといわれる。[3] 商山の呉氏の「本業」については、『書画記』の記述からは不明だが、呉其貞の族人の多くが書画骨董の蒐集と取引に従事していた背景には、徽州での書画骨董ブームの他に、典当業によって日常的に古物の取り扱いに親しんでいたことも、その要因の一つとして考えられよう。

『書画記』巻一は、彼の父のコレクションに関する記事から始まっている。諱は記されていないが、字は豹韋、「篤く古玩・書畫を好み、性は眞蹟を嗜む。尤も扇頭において甚だしく、千扇主人と號するも、然れども千に止まらざるなり」という書画骨董の愛好家であったという。この父をはじめ、呉其貞の一族の中には、布衣たると官位を有する者たるとを問わず、風雅な趣味を嗜む者が数多く存在していた。[4] 実は彼の族人のうち、書画骨董の売買を仕事としていることがはっきり記されている人物は「族人の心陽」呉仏斉だけである。彼は「骨董を業とするを以て時に稱せられ」た人物であったが（巻一「唐希雅秋葵図絹画一幅」）、もちろん彼が例外だったわけではない。このほか呉其貞の一族には面白い人物が幾人

も登場するのだが、それについては全て別稿に譲り、[5] ここでは後の呉其貞の活動に深くかかわる人々についてのみ紹介していくこととする。

第二節　上海・嘉興在住の族人たち

「性は温雅にして、美髯は臍を過ぎ、詩辭を善くし、尤も五言に長」じ、「宋拓の字帖は家藏甚だ多く、一白定大士瓶有りて希世の佳玩と爲す」書画骨董コレクターでもあった「伯徵兄」呉明遠は、「禾中の李九疑」すなわち李日華と親交を結んだ（巻一「銭舜挙石勒参禅図小紙画一巻」）。李日華は彼との交流を記しこう評している。

> 歙友の呉伯徵、余の郡の北郭門外に寓す。市聲洶洶たり。伯徵　一室に戢影し、棐几・薫爐・法書・名畫、其の躭味を恣にし、蕭然として塵中に在らざるが如きなり。一奇蹟を得る毎に、輒ち馳せること一奚にして余の評決を取る。余　年來書畫中において頗る進長する有り、伯徵の助けを得ること多しと爲す。

これによると、呉明遠は李日華の居宅のすぐ近くに寓居を構え、ここを拠点として書画骨董を集め、李日華との交遊を通じ、相互に鑑賞経験を積んだことがわかる。[6]

「翼明兄」呉懐賢も商山の呉氏に連なる一人であり、「人と爲り孝弟を以て自ら持し、博古を好み、尤も書畫子を嗜む」彼は、嘉興に寓居をかまえ、ここに「海内の名物」と称される書画骨董の名品の数々を蓄えた（巻一「馬遠小画図冊子計十六頁」）。ところが、天啓年間に魏忠賢に対する激越な批判を行った彼は、同郷の汪文言の徒党として逮捕・投獄され、身に完膚無きまでに拷問を加えられ獄死、妻の程氏もショックのあまり死んでしまう。籍没を免れた家産に顔真卿の《劉中使帖》があり、この作品は蚕筐の中に秘匿されたため《蚕筐帖》と称されるようになったという。[7] 後に息子の道昂は上奏して父の罪を晴らし、徽州をたびたび訪れた陳継儒に墓誌銘の撰文を依頼、名誉回復を図っている。[8] 後に呉其貞も自ら嘉興に赴き、李日華の息子の李肇亨（巻三「黄大痴渓山風雨図紙画一巻」）、孫の李琪枝のもとを訪ねているが（巻六「梁楷王右

軍題扇図紙画一小巻」)、その背景には、こうした一族同士のつながりが存在していたのである。

これとは別に、徽州以外の地に拠点を置いていた者の中に「濂水伯」呉元維がいた。呉其貞は、彼の息子である仲堅兄に所蔵の書画を見せてもらった際に、

伯は別業を有ち、上海に在りて、古玩を嗜む。…(中略)…顧氏の刻する所の『印藪』併びに秦・漢の銅・玉の圖章は、悉く得る所と爲り、復た數を増すこと百方、集めて一書を爲り、共に八巻、顔に『印統』と曰う。王百穀(穉登)之が序を爲り、羅王常(不詳)の刻する所なり(巻一「三朝宝絵図冊子四本計一百冊」)。

と記し、呉元維が印章を蒐集して印譜を刊行したことを伝える。[9] 彼が上海において好事家たちと盛んに交遊していた様子が窺える。

清代に入ると、呉其貞とその族人たちは、杭州・蘇州・嘉興にそれぞれ寓居を構え、明末と同様に、当地のコレクターや商人たちと密接な関係を取り結ぶこととなる。そして互いのもとを活発に往来し、一族同士で書画骨董の取引を行う拠点としていくのであるが、これについては第四章第一節において述べる。

① 年月日の注記の初出は崇禎八年(一六三五)春二月三日、呉其貞はこのとき数えで二十九歳である(『書画記』巻一「張萱士女鼓琴図絹画一巻」)。

② 商山は上山とも記され、休寧県城の南四〇里に位置する。商山の呉氏は、唐の侍御少微公を始祖と仰ぎ、明代に至るまで数々の名士を輩出したとされる(汪孟沚・戴廷明等撰『新安名族志』前巻)。徽州の呉氏についての専論には、張冠増「徽州商人の興起と親族組織——歙県呉氏一族の事例分析——」(『比較都市史研究』第一〇巻二号、一九九一年)がある。

③ 許承堯『歙事閑譚』巻一八所引『歙風俗礼教考』

④ 『書画記』巻一「元人無名氏野草図紙画一小幅」。現時点では、この一族の族譜史料を検出し得ていないため、以下に挙げる人々の系譜上の関係は、残念ながらよくわからない。なお、清代の徽州の地方志には、『書画記』には見えない、商山の一族と出身・輩行を同じくする呉姓の人物が多数登場し、科挙や捐納により官位を手にした者が多く存在したことを推測させる。

⑤ 呉其貞の一族中には、琴のコレクターであった「中元兄」明宸(『書画記』巻一「宋人小画図冊一本計十二張」)、内府由来の「度金の烏思蔵仏」蒐集家であった「師利兄」明本(同書同巻「馬和之豳風図紙画一巻十則」)、呉其貞と作品を奪い合い絶交してしまった「去非姪」聞礼など(同書巻二「三朝翰墨一本計十余則」)、一癖ありげな人物が大勢いた。とりわけ陶磁器模造の名手の「茂真叔」民・印章の模

刻が趣味の「龍媒姪」家駒については、明末清初の贋作商売をめぐる問題に関連して、呉其貞の先輩の王越石を論じる中で取り上げる。

⑥ 李日華『六研斎筆記』巻一。ちなみに李日華の『紫桃軒又綴』巻二には、嘉興の春波里に寄寓した「欽友の呉秋林」なる人物のことが記される。彼は、書法は元の趙孟頫に、画法は明の周臣にそれぞれ範を取り、蘭竹の描写に秀でていたが、五十歳に至らぬうちに世を去ったという。呉其貞も「『紫桃軒』の諸書に多く其の事を載す」と述べていることから、「秋林」は呉明遠の別号であり、両者は同一人物であった可能性が高い。姜紹書『無声詩史』巻六にも同内容の評伝を載せるが、誰は不明である。呉其貞のいう「宋拓の字帖」についても李日華は、呉明遠が宋拓の《黔江帖》を所有しており、それが彼の第七子の清臣に受け継がれていたことを伝える（李日華『六研斎二筆』巻二）。

⑦ 『書画記』巻一「顔魯公劉中使帖」。後年呉其貞は、蘇州を訪問した際に再びこの作品に出会うが、文徵明・董其昌らと並んで記されていた呉懐賢の題跋は、既に取り去られてしまっていたという。

⑧ 陳繼儒『陳眉公先生全集』巻四三「特贈工部主事翁明呉公伝」。呉道昂も科挙受験の傍ら「古玩」に熱中し、父の家産が籍没された後にも、なお肯堂なる書斎に数多くのコレクションを有し、呉其貞も頻繁に彼のもとを出入りしている（『書画記』巻一「黄筌古木幽禽図画一幅」）。

⑨ 『印藪』とは、「玉印一百六十有奇、銅印一千六百有奇」を所有していた上海の顧従徳が、隆慶年間に出版した印譜である（『四庫全書総目』巻一一四）。『印統』巻一の巻末には「新都呉氏樹滋堂繡梓」とあり、おそらく呉元維の別業の名であろう（『天禄琳琅書目』巻八）。

第三章　徽州のコレクターと書画骨董売買

『書画記』の記述からは、明末の徽州における書画骨董の蒐集と取引がどのようなものであったのかについて、興味深い事実を知ることができる。次に、そうした事例について紹介しつつ論じていこう。

第一節　明末徽州の書画骨董ブーム

呉其貞の親しい友人の一人、汪三益なる人物は、崇禎一二年（一六三九）四月一四日に渓南の呉氏の収蔵品を鑑賞した際、明代後半期以降の徽州における書画骨董の蒐集状況についてこう述べている。

呉氏の藏物は、十を散じて六を有てるのみ。昔を憶うに、我が徽の盛んなること、休・歙の二縣に如くは莫く、而して雅俗の分も、古玩の有無に在り。故に重値を惜しまずして爭いて而して收入す。時に四方の玩を貨る者は風を聞きて奔りて至り、外に行商する

者も搜尋して而して歸り、此れに因りて得る所は甚だ多し。其の風は始め汪司馬兄弟に開かれ、溪南の吳氏・叢睦坊の汪氏に行われ、之れを繼ぐは余の鄉の商山の吳氏・休邑の朱氏・居安の黃氏・楡村の程氏、得る所は皆な海內の名器なり。今日に至りて漸次散去し、其の得失を計るも百年に滿たず。見る可し、物に聚散有るは理の必ず然らしむる所なるを（巻二「黃山谷行草殘缺詩一巻」）。

徽州府下の休寧・歙の二県における書画骨董コレクションブームの火付け役となったのは、汪三益の認識にも示されているとおり、汪司馬兄弟、すなわち「汪氏二仲」と称された汪道昆・道会であった。彼らと、王世貞をはじめとする蘇州の文人たちとの密接な関係のもと、徽州における書画骨董コレクションは本格化し、この流行の本家本元である蘇州に追いつきはじめる。同時代の徽州人、詹景鳳が著した『東図玄覧編』には、この間の事情を伝えるエピソードが数多く記されている。①

やがて、右に列挙された徽州の「巨姓大族」たちはこの動向に感化され、一族を挙げて蒐集に狂奔するようになる。かれらはいずれも塩の取引をはじめとする商業資本の蓄積によって財をなし、ありあまる経済力にものをいわせて膨大な量のコレクションを形成したのである。そして、さきに商山の吳氏の事例にも見たとおり、中国各地の主要都市に商業網を展開していた彼らは、商取引に赴く傍ら当地の書画骨董を精力的に購入した。こうした需要の増加に伴い、徽州は書画骨董取引の一代中心地となり、各地からも商人が雲集する。②

徽州における書画骨董の商取引の様子について吳其貞は、

余の鄉、八・九月に、四方の古玩は、皆な龍宮寺の中において集售せらる（巻二「趙子固幽蘭図紙画一巻」）。

と、龍宮寺における骨董市のことを伝える。この寺は、休寧県の城南三〇里の藍田村口にある古刹で、唐の天祐二年（九〇五）の創建と伝えられる（程敏政『篁墩文集』巻一九「重修龍宮寺記」）。吳其貞の時代には「秋月には百物萃集し、交易の勝地爲り」と、彼の地元商山付近一帯における商取引の中心地となっていた。一時この寺は廃れようとしていたが、吳其

貞の族人の「象之侄」呉甲先が「金萬餘錠を輸して之れを新しく」したという（巻二「劉瓊墨竹図小紙画一幅」）。『書画記』には、休寧の王虎臣の息子が龍宮寺の骨董市に黄公望《贈別図》を持ち込んだ、と記録される以外、残念ながら骨董市の具体的な様子についてあまり詳しい描写は無い（巻二「黄大癡贈別図小紙画一幅」）。

むろんこの過程で、「海内の名器」に加え、少なからぬ数の贋作が市場に流通するようになったことは言うまでもない。そしてついには、「古玩」をどれほど多く蒐集したかによってその持ち主（あるいは家柄）の「雅俗の分」が決まる、と堂々と述べられるほど極端な所まで行き着いてしまった。本来「古玩」の蒐集は、士大夫の「雅」なる精神の発露として私的に行うものだったはずであり、③これではもはや完全に本末転倒と言わざるを得ない事態である。ここに至って、書画骨董は金次第で入手可能な、ステータスシンボルとして誇示するための道具と化した。これを趣味の堕落と捉えるか否かは別として、沈徳符が、本来「清玩の具」であるべき書画骨董を、「新安の耳食の徒」が手当たり次第に買い漁った結果、市場には贋作が横行し、価格の騰貴に拍車がかかった、と嘆いて見せた背景には、このような事情があったのである。ともあれこの結果、詹景鳳が豪語したように、徽州の書画骨董コレクションは蘇州のそれと比肩しうる内実を、質と量の両面にわたって備えるに至ったのである。

第二節　仲介業者たちの活躍

一方で、徽州は万暦年間のいわゆる「鉱税の禍」などの事件によって、たびたび打撃を被ってきた。中でも、天啓年間の政局を壟断した宦官の魏忠賢により、都合三回にわたって引き起こされた「黄山の獄」は、徽州の巨姓大族に大きな被害をもたらし、書画骨董コレクションの流出が相次いだ。④

ところがこの事態は、徽州における書画骨董の商取引を活発化させ、以前にも増して流通を促進させる契機ともなった。かかる取引に関わったのは、むろんそれを所有する一族の面々であったが、呉其貞の記述からは、その家に雇われている

「家人」や、出入りの「門客」といわれる人々が、販売・購入を請け負うケースが目立ち、このことは注目に値する。

溪南の呉氏は、古くから徽州における最有力の名族の一つであり、歙県を中心に、南溪南・西溪南・莘墟など多くの支族に分岐していた。崇禎年間においても、彼らのコレクションの量と質は、以前に比べやや衰えたとはいえ、汪三益によって彼らと併せ称された叢睦坊の汪氏が、「多くの人は皆な古玩を尚び、所收の名物は溪南に亜らざるも、今已に八九を散じ去る」という有様だったのに比べると（巻二「薩天錫雲山図紙画一巻」）、まだまだ他を圧倒していたようである。

当時、溪南の呉氏のうち書画骨董のコレクターとして知られていたのは、書画の鑑賞において「目力は呉氏の白眉爲り」と称された呉本文（巻二「陶隠居雪賦一巻」）、「琮生、諱は家鳳、乃ち巨富の鑒賞、呉新宇の第五子なり。弟兄五人の行は皆な鳳字なれば、故に時人之れを呼びて「五鳳」と爲し、皆な古玩を好む」という五人兄弟などがおり（巻二「王右軍平安帖一巻」）、いずれのコレクションも名品揃いであったが、圧巻は呉文長のコレクションである。崇禎一二年（一六三九）四月初一〇日の前後に、呉其貞はそれらをまとめて閲覧する機会を得たが、それはこういう有様であった。

文長は、大年の繼子にして、余の爲に盡く畫二百餘・手卷四五十・畫册數本を出す。呉可權・汪三益曰わく、「當に三日を作して觀るべし」と。余曰わく、「古人書を看るに、一目にして三行を下す。今畫を看るに、豈に能く一目にして三幅を下さざらん耶。但だ卷を開くこと快ければ、多きを怕れざる也」と。是に于いて余と可權・三益と、齊に開き齊に捲くこと、風の殘雲を捲くが如く、半日にして看畢わんぬ。美醜を口述すること遺漏する所無く、宋・元の佳なる者は已に之を筆したり。三人皆な瞠目叫奇す。（巻二「李伯時白描羅漢図紙画大冊子一本計十頁」）。

ほかにも溪南の呉氏のコレクションは『書画記』に頻繁に登場するが、それらの品々は呉氏の「家人」や「門客」などの手を経て呉其貞のもとに持ち込まれることがしばしばであった。呉文長のコレクションをともに閲覧した呉可権・汪三益の二人もそうした人物であり、この時期呉其貞と最も親しくつきあっていた。

呉可権は溪南の人で、五鳳、すなわち呉新宇の五人兄弟の門客、「人と爲りは滑稽にして、技藝多く、善く人の聲音を

效いて、酷似せざる無く、當今の一優孟爲り」という風変わりな人物であった。おそらく権門のサロンに出入りする幇間のような存在であり、座談を盛り上げるための知識として、書画骨董にも通じていたのであろう。[5] 汪三益は、さきに徽州の「古玩」をめぐる状況を述べた人物で、南居亭主人を名乗った（巻二「梅花道人清渓勘鶴図絹画一大幅」）。彼もやはり、「渓南の吳氏の門客にして、凡そ古玩を鬻ぐに皆な其の手に由り、而して眞僞は懵如たり」と評され、渓南の吳氏のコレクションの販売を一手に請け負い、ずいぶんとあくどい商売もやっていたようである（巻一「唐人廓塡王右軍中郎帖一巻」）。吳其貞の宋元の書画コレクションも、彼から買い受けた物がかなりの数に上る。

彼以外にも、渓南の吳氏をはじめとする徽州のコレクターの所蔵品を入手した者は多数いたが、頻出するのは渓南の王鳳およびその家人たちである。王鳳なる人物は、その詳しい事跡は不明であるが、積極的に伝世の名品の入手に努め、さきに汪三益が挙げた名族、休寧の朱氏や（巻二「張僧繇五星十八宿真形図絹画一巻」）、渓南の吳氏との間で取引を行った記事が見えている。彼は、《余清斎法帖》を刻した渓南の吳廷旧蔵の名品、顔真卿《祭姪季明文稿》の真蹟も入手しており、その記事の中で吳其貞はこう伝える。

> 以上の四卷、汪天錫・吳雲從・吳國珍・宋元仲の手に觀る。原は是れ吳江村（廷）の物にして、後に王鳳昆仲に屬し、而して宋元仲等は王鳳の家人に係る也（巻一「顔魯公祭姪季明文稿一巻」）。

つまり一旦王鳳らが入手したものが、さらに王鳳の家人の手に渡ったことになる。この王鳳の家人四人組は、ここ以外にもたびたび『書画記』中に顔をのぞかせており、いずれも渓南の吳氏らの旧蔵品を、同じルートで入手しては売り捌いていた。吳其貞は、彼らの手により「余の郷の諸書畫は皆な售去せらる」と述べている（巻二「趙松雪梨花白燕図小紙画一幅」）。

彼らは主として、徽州の蒐集家の間における書画骨董取引の仲介業者として活動していたが、一方で、他の江南の諸都市に拠点を設け、そこで商取引に勤しんでいた者も存在した。その一人が吳能遠である。彼について吳其貞はこう述べる。

歙の西溪南の人にして、王鳳と屬して兄弟と爲り、崇禎年間に閶門に家す。凡そ溪南の人古玩を携えて出賣するに、皆な能遠の家に寓す。故に得る所は甚だ多く、盡く吳下において售り、此れ是の剩餘せる所の物なる耳（巻四「馬和之設色山莊図絹画一巻」）。

吳能遠もやはり書画骨董の取引に携わっていた人物。注目されるのは、さきの王鳳と兄弟の関係を結んでいた彼の寓居が、溪南の人々が「古玩」の販売を行う際の拠点となっていた点である。蘇州最大の繁華街の閶門附近はまた、書画骨董取引の一大中心地であったことはいうまでもない。⑥

以上まとめると、明末の徽州における書画骨董取引は、商山の吳氏の事例に見たように、同姓の一族同士の結びつきを基礎として、あるいは家人・門客ら、取引を委託された使用人たちによって、江南一帯に亘って組織的・広域的に行われた、と結論づけられよう。

なお、かかる販売活動の過程において、これら同業者による「行」と呼ばれる組合が組織されたかどうかについては、『書画記』からは明らかな事例を読みとることはできない。沈振輝は、万暦年間に徽州の汪姓の画工が「画行」を創設し「画場」と称した事例や、蘇州の「画行」は常に「画幇」と命名され、城南の「金福星画幇」は盛んな取引を行い、顧客は蘇州以外からも訪れたことを挙げている。⑦吳其貞も汪不易なる人物について、

不易は居安の人にして、畫を能くし、亦た能く書畫を辨論し、「骨董行」中の有數の者爲り（巻二「高士謙晴竹図小紙画一幅」）。

と述べているが、この文中の「骨董行」が、果たして沈振輝の言うような「画行」と同じような性質の組織であったのかどうか定かではない。むしろここでは、仇斗垣なる人物の評価において「博古にして目力は骨董中の白眉爲り」と述べ（巻一「張樗寮楷書秋辞一巻」）、吳幼白なる人物のことを「老骨董客」と呼んでいるように（巻一「倪雲林改詩図小紙画一幅」）、単に「骨董の取引を世業とする者」を指していると見た方がよさそうである。

① 一六世紀中後期における蘇州と徽州とは、あたかも車の両輪のごとく互いに支え合いつつ、江南の書画骨董ブームを牽引していた。このことについては、前掲「はじめに」の註⑤中砂明徳著書五九―六四頁に、『東図玄覧編』などの諸史料をもとに詳述されているので、こち

らを参照されたい。なお李大空「明清之際贅助芸術的徽州商人」（安徽省文学芸術研究所編『論黄山諸画派文集』所収、上海人民美術出版社、一九八七年）においては、徽州の巨姓大族のコレクションが、当地の絵画作品や法帖・墨譜の出版に及ぼした影響について、呉其貞の記述などを援用しつつ論じられている。こちらも参照されたい。

② 徽州外地の商人に、蘇州で「骨董肆」を営む陸二泉なる人物が登場するが（『書画記』巻一「閻立本鎮諫図絹画一巻」）、李日華も崇禎元年（一六二八）二月二九日に、再度の起用を受けて嘉興から北京に赴く途中、「半塘の陸山人二泉の家に至り」元・明の諸名家の画作品を鑑賞している（李日華『璽召録』）。

③ 井上進「芸術の背景――明代文化の軌跡」（『世界美術大全集』東洋編第八巻「明」、小学館、一九九九年）

④ 黄山の獄については、程演生『天啓黄山大獄記』を参照。奇禍に罹って落命したさきの呉懐賢こそ、その第二回目の事件の主役である。中でも、渓南の呉養春・楡村の程季白らをはじめ、徽州のコレクターに最大の打撃を与えた第三回目とその影響については、嘉興の汪何玉との関わりを通じ、別稿にて詳述する。

⑤ 『書画記』巻二「趙希遠行書杜詩二首為一巻」。この時代には、声色で様々な物真似をする人物が、縉紳の宴席に招かれて芸を披露しており、揚州の郭猫児父子や北京の某は、屏風の後ろに姿を隠して、犬・猫・豚など動物の鳴き声から、夫婦の睦言、火事場の群衆が大騒ぎをする様に至るまで、声色を巧みに使い分けて見事に演じたという（林慧如『明代逸聞』巻七「口技」）。

⑥ また、これは少し後の事例になるが、南渓南の呉振魯は「淮揚に商い、古玩を好み、所蔵の重器は、楡村の程氏・叢睦坊の汪氏より得る者多し」と伝えられる（『書画記』巻四「虞永興汝南公主墓志一巻」）。彼はおそらく、揚州において塩の取引を行う傍ら、書画骨董の売買にも携わっていたのであろう。

⑦ 前掲「はじめに」の註⑥沈振輝論文一〇四頁

第四章　清初における呉其貞の足跡

呉其貞が『書画記』巻二の末尾近くに、「以上の五種、忽忽に呉可權の手に觀る。時に鼙鼓の地に遍きに値れば、何ぞ經營に暇あらん。時に乙酉八月廿二日」と記すように（巻二「倪雲林林亭遠岫図小紙画一幅」）、一六四五年以降、清軍の南下に伴う兵乱によって徽州一帯は一時期騒然となる。そのような中、呉其貞も商売どころではない状態が続いたのであろう、しばらくの間地元に留まるものの、その間の記述はやや減少する。そして順治五年（一六五一）八月からは、たびたび徽州を離れて江南各地の都市を長期間渡り歩き、以後活動の重心はこちらに置かれることとなる。清代に入ってからの呉其貞の活動については、すでに楊仁愷がその概略を記している。① 以下これを援用しつつ、『書画記』巻三、即ち順治三年

（一六四六）正月一一日以降の記述に即して、彼が生き生きと活躍し始め、やがて清初の芸術市場において重要な役割を果たすに至った様を、詳しく見ていくこととする。

第一節　江南各地の活動拠点

『書画記』の記述が終わる一六七七年までの約三〇年間に、呉其貞が遍歴した地域は、西は南京、北は揚州、南は杭州・紹興・銭塘に及び、その間に点在する嘉興・蘇州・丹陽・常州・金壇・宜興など、揚子江下流域と大運河南半に沿った江南の主要都市がほぼ網羅される。そして、これらの地で彼が出会ったのは、自らの一族に連なる人々、同郷出身あるいは在地の書画骨董商人たち、そして無名のコレクターから中国の美術史上に著名な賞鑑家に至るまで、古玩に携わるありとあらゆる人々であった。ここではまず呉其貞の族人に関わる記事から見ていこう。

『書画記』巻三以降、徽州在住の族人はほとんど登場しなくなる。清の時代に入ってからも、地元の徽州にはなお数多くの族人が存在したはずであるが、『書画記』の前半部分に比べてその登場の頻度は大幅に減少する。このことは、第六章にて述べるように、徽州における書画骨董の取引が次第に下火になり、呉其貞の足が徽州から遠のいていたことと関係する。

一方で、徽州の外地に拠点を構え、書画骨董の取引に携わる族人が頻繁に現れ始める。呉其貞の一族が最も多く居住していたのが杭州であったようだ。彼らについて、呉其貞が還暦を迎えた際の記事にも、「余　杭城の親族の賀を避け、特に銭塘を渡りて禹穴を探り、諸鑒賞家を訪求して古玩名畫を觀る。意わざりき、此の《永寶長生圖》を獲んとは。殆ど天此れに假りて以て余の壽を爲せるの徵しならん歟」と述べている（巻五「趙松雪古木竹石図絹画一幅」）。杭州在住の彼ら一族の内、たびたびその名が見えるのが「子雲姪」と呼ばれ、「姪　諱は維翰、余と同庚にして髫年より交わる也。舉止は率眞にして、平居讀書博古を好む」という人物（巻三「倪雲林古木竹石図小紙画一幅」）。呉其貞も、時折彼の「靡盈堂」を訪

問しては、蒐集した書画を閲覧し取引を行っている（巻四「王叔明寒窗風雨図紙画一小幅」）。この杭州には、呉其貞自身も寓居を構えて主要な活動拠点の一つとしており、康熙一二年（一六七三）九月一〇日の記事に、宋の書家、張即之の作品にまつわる思い出をこう記している。

向に公は水仙と爲り、其の書は能く火災を禁ずるを知り、特に供養を杭城に請う。是の日、杭城の仙林橋より火起き、南のかた金剛寺の前に至るまで、東のかた長明寺の後に至るまで、西のかた覺苑寺に至るまで、三萬七千家を焚ける有り。古來未だ此の如き有らざるなり。而るに火の到る所の地、余の居と隔たること二三百歩より遠からず。未だ必ずしも余の一念の仙を動かし、卽ちに呵護を爲せるに因らずんばあらざる也（巻六「張樗寮種豆南山下陶詩一首」）。

張即之が「水仙」、すなわち水を司る仙人になった、という説話は、他の文献からは確認できていない。[2] しかし、過去の著名人が仙人や守護神として信仰を集める現象は、明末清初の江南において広範に見られたという。[3] いうまでもなく、書画の保存にとって最も注意すべき事の一つは火の用心であり、呉其貞は張即之の霊験のおかげで、すんでの所で延焼を免れたというのである。[4] このほか、彼の書き残した記事の中には「蘇州の寓居」も登場し（巻三「易元吉松鼠図小紙画一幅」）、おそらく江南の主要都市には、ほかにも恒常的な拠点をいくつか構えていたと推測される。

杭州以外の都市に拠点を置いて活動していた呉其貞の族人で、その名が見えるのが、嘉興にいた「姪孫于庭」であった。彼についての詳しい記事は無いものの、順治八年（一六五一）一一月望日に、呉其貞が嘉興の長水塘にある彼の家を訪れて以降、彼の方から蘇州に滞在中の呉其貞を訪問し取引を行うなど、幾度か登場する人物である（巻三「趙仲穆淵明図小紙画一幅」）。

そして、呉其貞の長男の振啓・次男の振明もまた、父親と同じ道を選んでいた。振啓の名前は、順治一四年（一六五七）四月二三日に、嘉興の項元汴旧蔵の名品《万歳通天帖》を鑑賞した際に、同席者として登場する（巻四「唐人双勾万歳通天帖一本」）。以後も父親とは別行動を取っていたらしく、自らが蒐集してきた作品を父の元に持参しては鑑定を依頼してい

る記事が散見する。一方振明は、康熙一二年（一六七三）四月二〇日に、湖州で購入した趙孟頫《松渓釣艇図》を、杭州にいた父のもとに持参したことが記される（巻六「趙松雪松渓釣艇図紙画一小長幅」）。

以上のように、清の時代を迎えてからは、呉其貞の一族は江南各地の拠点を渡り歩き、盛んに書画骨董の取引に勤しんでいた。この頃になると、彼ら一族の活動は、呉其貞と同世代、もしくは彼らの次の世代の人々によって担われるようになっていく。その中で呉其貞は、一族の長老格にして最高の目利きとして、彼らの間で中心的な存在となっていったのである。

第二節　《高頭大画冊》の完成

自らのことについてあまり語ることのない呉其貞ではあったが、彼が半生を費やして完成させた画冊について、康熙五年（一六六六）に徽宗の小品を得た際、誇らしげにこう語っている。

> 噫、余　生平選ぶ所の小幅の名畫の最も精なる者をもって、《大冊子》を集成せんと欲するも、徽宗の冠首無きが爲に之を高閣に置く。今既に此れを獲、日ならずして裝潢すれば、豈に世間の畫冊を壓倒せざらん耶（巻五「宋徽宗金錢羈雀図絹画一小幅」）。

この画冊に収めるべき作品についての記事は、『書画記』巻二から既に出現しており、「余　此れ（米友仁《雲山圖》）を得て以て《高頭大畫冊》の領袖と爲す」と述べている。[5]《高頭大画冊》がさきの記事における《大冊子》に当たることは間違いなく、これ以降画冊中に収めたと記される作品は、馬遠《宮苑乞巧図》・呉鎮《竹渓泛艇図》・蘇軾《竹石図》などが挙げられ、[6]いずれも宋・元の諸名家の作品が並ぶ。そしてついに念願の徽宗の真跡を得て、ようやく画竜点睛がなったのである。

この画冊に全体としてどれほどの作品が収められていたのか、呉其貞の死後その行方がどうなったのかは、残念ながら不明である。ともあれ呉其貞はこの画冊について、その質の高さは「世間の画冊を圧倒」するであろうと豪語しており、

そこには一流の賞鑑家に比しても決して引けを取らない、自らの鑑賞眼に対する自負がありありと窺える。おそらく彼の蒐集活動の集大成ともいうべき作品集であったのだろう。

① 楊仁愷『国宝沈浮録――故宮散佚書画見聞攷略――』増訂本（遼海出版社、一九九九年）第一章第三節「清代鑒蔵活動概述」

② 張即之の作品と火事とがかかわる話は、安世鳳『墨林快事』巻七「楞嚴蓮華経」に記されるが、これは安世鳳が四明に赴任中に火災に遭い、家蔵の張即之《妙法蓮華經》が焼け残った話なので、おそらく無関係であろう。同じ張姓の人物としては、同時代の張瑞図について、二水と号した彼は水星の生まれ変わりであるため、その書画を書室中に懸けておけば火災の厄を免れる、という評判があったという（姜紹書『無声詩史』巻四「張瑞図」）。おそらくこの話が、張即之の霊験として呉其貞に伝わったのかもしれない。張瑞図をめぐるこの伝説については、福本雅一「張瑞図」（『明末清初』同朋舎、一九八七年）三〇頁に詳しい。

③ 合山究「明清の文人とオカルト趣味」（荒井健編『中華文人の生活』平凡社、一九九四年）

④ この杭州の大火については、徐岳『見聞録』巻三「火災」に詳しい。古来、書画や蔵書を火災から守るため、葛籠の蓋の裏側に春画を貼るなど、厭勝のまじないを施しておくことがあったという。相田洋「春画と厭勝――中国における性と民俗――」（『中国中世の民衆文化――呪術・規範・反乱――』中国書店、一九九四年）を参照のこと。

⑤ 『書画記』巻二「米元暉雲山図小紙画一幅」。ただしこの件が、この作品を入手時（崇禎一三年・一六四〇）に書かれたものか、後に付け加えられたものであるかは不明。

⑥ 以上順に『書画記』巻二「馬遠宮苑乞巧図小紙画一幅」・同書巻三「梅道人竹渓泛艇図小紙画一幅」・同書巻五「蘇東坡竹石図絹画一小幅」

第五章　清初の芸術市場と書画商人

明から清への王朝交代に際して、江南全域を襲った戦乱とそれに伴う社会的変動とは、書画骨董の流通の活発化に一層の拍車をかける結果となった。没落した旧家のコレクションが散逸して市場に大量に供給される一方、新興のコレクターたちがこの機会を捉えてこれらを積極的に蒐集しはじめたのである。こうした状況下、古玩を取り扱う専門業者たちの役割は一層その重みを増しはじめる。

蘇州の帰希之という人物は、順治九年（一六五二）正月望日の記事に登場し、以後呉其貞の最晩年に至るまで最も頻繁にその名が現れる人物である。

歸は本は市賈にして、性は修飾を善くせず、田産を置かず、惟だ書畫に耽るのみ。時に鼎革の後、凡そ故家の書畫の出鬻せらるるあらば、希之皆な之れを售う。薦紳官長之れを求むると雖も得る勿き也。人　其の僻を知り、多く憐れみて而して之れを護持す。居る所の樓、高さ大きさは丈許りに過ぎず、士夫嘗に之れに詣り、皆な世外の交を作す。蓋し一奇士也（巻三「趙松雪黒犬図」）。

この些か偏屈な風流人の居処は、呉其貞が蘇州に滞在する際に必ず立ち寄る場所であった。そして、ここで彼が閲覧・取引した唐・宋・元の法書名画の数々は、いずれも掛け値なしの名品揃いであったという。隠者を装う外見とはうらはらに、相当な手腕の持ち主だったのだろう。① そして、彼の蒐集品の供給源となったのは、江南一帯の旧家のコレクションであった。

この時期、呉其貞が関わったコレクターの中には、先祖代々の収蔵を守り続けてきた者や、経済状況の悪化に伴いそれらを手放さざるを得なかった者もいた。その中には『無声詩史』七巻の著者、丹陽の姜紹書や（巻三「米元章多景楼詩一首」）、かの王世貞の孫にして四王呉惲の一人、大倉の王鑑など（巻四「関仝渓山積雪図絹画一巻」）、美術史上重要な人物がいたが、中でも圧巻は紹興の朱氏一族の収蔵である。

康熙五年（一六六六）六月二日、彼が還暦の誕生日を迎えた時に、彼は朱子祐なる人物を訪問している。

子祐は東坡《竹石圖》を售りたる子逝の兄に係り、大學士の玄孫、吏部通政公の曾孫也。通政、諱は敬琚、號は石門。篤く博古を好み、尤も書畫に甚だし。目力は高く、當世の收藏において天下に名だたり、子孫雲礽し、世澤悠遠にして、江南の第一家爲り。見る所の各房の玉銅窰器は一一精絶たり（巻五「趙松雪古木竹石図絹画一巻」）。

大学士とは万暦年間に宰相を務めた朱賡のこと。その子の石門については、縁戚関係にあたる張岱が、叔父の張聯芳や嘉興の項元汴らとともに、江南の五大収蔵家としてその名を挙げている（張岱『瑯嬛文集』巻四「張氏家譜」）。朱石門の収蔵の豊富さと鑑識眼の高さについては呉其貞も絶賛しており、別の箇所ではこう述べている。

余　明朝の書畫を收藏せる名家の目力高き者を見るに、數十幅の中に亦た二三は優孟の衣冠爲るもの有り。惟だ朱石門先生の家のみ見る所の若干は、片紙隻字と雖も皆な眞貨に屬す。三百年來の第一人也（巻五「唐宋元横板大画冊一本計十二首」）。

彼の子孫たちは、その名が記される曾孫の世代の他に、各坊の序数で呼ばれる孫の世代の人物も夥しく登場する。彼ら一門との間で、呉其貞は盛んに取引を行っており、たとえば康熙六年（一六六七）四月には、

此の圖、去年六月に、紹興の朱石門先生の令孫　十三老の家に觀る。人を令て釋手せしむる能わず、得られざるを恨み、圖の下に臥し、千謀百懇す。今年四月に至り、方めて購いて手に到る（巻五「李伯時蓮社図絹画一幅」）。

と述べ、仲介者を通じて八方手を尽くし、一年がかりにしてようやく李公麟の画を入手したことを記している。

このように、明以来の旧家に蓄えられていたコレクションは、徐々に商人たちの手によって一旦蘇州に吸い上げられ、ここを経由してさらに北方へと移動していくことになるのだが、そのことについては第六章において述べる。

呉其貞は、康熙二年（一六六三）正月十日に、蘇州において張先山なる人物と出会い、馬遠の《梅渓図》を鑑賞した際のこととしてこう述べている。

先山は山東膠州の人にして、閥閲の世家たり。乃翁は篤く書畫を好み、古今の記錄を攷究すること廣し。凡そ書法名畫の江南に在る者有らば、先山をして訪ねて而して之を收め命む。余の爲に「某の物は某の家に在り」と指敎すれば、獲去する所頗る多き耳（巻五「馬遠梅渓図絹画一幅」）。

この張氏についてこれ以上のことは不明だが、張先山の父は、おそらく明清鼎革の混乱を奇貨と見て、江南一帯に出回っている書画を買い集めるべく息子を送り出した。蘇州の寓居を拠点として構えた張先山は（巻五「小李将軍龍舟図絹画一

巻)、どの作品が誰の家に所蔵されているかについて、自らが持つ情報を伝えてくれたのである。

帰希之や張先山をはじめ、呉其貞と関わった商人やコレクターにとって、絶えず人手から人手へ渡り続ける書画骨董の行方はなにより重大な関心事だったであろう。彼らの間では、書画骨董の現物のみならず、それらの動向を巡る日々の最新情報についても盛んにやりとりされていたのである。その情報の中には、コレクションを手放しそうな人物や、新たなコレクションを欲しがっている人物について、その人となりから経済状況に至るまで様々な事柄が含まれていたに違いない。そして、清初の混乱期に際して、彼らの行動範囲の広さと情報力は、明末以上に一層大きな強みとなっていった。

第二節　呉其貞の蒐集指南

呉其貞はまた、コレクターたちからの依頼により、彼らのために書画の名品を買い集めたり、鑑定したりする仕事を請け負っている。その一人が太興の季因是である。

> 先生、諱は寓庸。戊辰の進士にして、祥符令由り吏部郎に終わる。[2] 財に富み、盡く天下の法書名畫を收めんと欲す。然れども志有れども而れども目力未だ逮ばざる也。

彼の官僚としての事跡は、天啓年間に魏忠賢の生祠を建てたことぐらいであったが(『明史』巻三〇六「閹党」閻鳴泰伝)、その資産に飽かせて、中国に現存するあらゆる書画の作品を収集しようとの野心を抱いていた人物でもあった。呉其貞は、せっかく意欲はあるものの肝心の見る目については今ひとつ、と評している。

ただし、量に比例してそのコレクションの質はかなり高かったようで、この記事を記した順治一〇年(一六五三)四月二五日には、鍾繇《小楷季直表》・王羲之《袁生帖》・蘇軾《前後赤壁賦》などの法書、黄公望《富春山居図》・王蒙《聴雨楼図》などの名画、いずれも芸術史上に名高い作品を十数点閲覧しており、これらについて呉其貞は「皆な名物也」と評している。おそらく呉其貞は、季因是の蒐集に協力する傍ら、所有する作品の鑑定をも担当する顧問格でもあったので

あろう。せっせと作品を鑑賞しては記録を取っている彼の姿を見ながら、季因是は感嘆して、

先生は予の目看し口詳し手記せるを見て曰わく、「君の能たるや、手は七絃の琴を揮い、目は千里の鴈を送るに過ぎたり」と。[3]

と述べたという。おそらく彼の科白は、顧愷之が絵を描く要諦として、嵇康の四言詩を踏まえて「手に五絃を揮うは易く、目に歸鴻を送るは難し」と常々語っていた故事に基づくものであろう（張彦遠『歴代名画記』巻五）。ともかく、呉其貞の鑑識の才能はそれを上回るものだ、という褒め言葉であるのは間違いない。

同年二月九日の記事として、再び黄筌《寒菊幽禽図》を鑑賞した件があらわれる。これによると、この日も王羲之《行書千字文》・賀知章《草書孝経序》・褚遂良《度人経》・米友仁《楷書金剛経》などの法書、趙伯駒《帰去来辞図》・関仝《千巌万壑図》・方従義《東晉風流図》などの名画、合計二〇点以上を閲覧したという。この日の夜に歓待を受けた呉其貞は、

夜飲に及び、紹興の朱氏の漢玉の龍尾觥を出して行酒す。先生曰わく、「古に云えらく、『燈前酒後、書畫を觀る可からず』と。我れ此の禁を破らんと欲す。君の意は若何」と。余曰わく、「興に適えば事として何ぞ可ならざらん」と。時に三更なり。是に於いて青衣に命じて秉燭せしめ、悉く書畫を前に陳べ、龍尾觥にて飲み、晉・唐・宋の墨蹟を觀、一一品評し、旦を待ちて而して別る。此の如きの風流、金谷園も數ならざるなり。[4]

と、晉の石嵩の別墅における雅集に比してこの夜の想い出を記している。季因是にとって呉其貞は、書画の世界において、自らと対等の立場にある名士として遇すべき存在であったことが窺える。

季因是の息子たちの中にも父と趣味を同じくする者がいた。

以上の四種、季大翁の三令郎　滄葦の處にて觀る。滄葦は諱は振宜、丁亥の進士。人と爲り豪爽にして、篤く古玩を好み、大翁の風有り。得る所は甚だ多く、皆な名を聞きて而して收入せる者なり。近日宋字六本、計一百二十張を集成す。古今の收藏、未だ此の如きの盛有らざるなり（巻五「李営丘騎驢踏雪図絹画一小幅」）。

丁亥は順治四年（一六四七）のこと。季振宜は清初の四大蔵書家の一人として知られ、宋元版の善本の入手に努め、銭曾の述古堂・毛晋の汲古閣をはじめとする江南各地の旧蔵書を多数蒐集、自ら『季滄葦書目』を著した。彼の死後、そのコレクションは大半が清の内府の所有に帰し、『天禄琳琅書目』にその多くが著録されている（葉昌熾『蔵書紀事詩』巻四「季振宜詵兮」）。

彼らの蒐集活動を支える上で、呉其貞の他にも協力した商人が幾人か存在した。その一人が福建の陳以謂である。彼は揚州を拠点に書画舫を仕立てて活動していたが、商売道具の作品そのものに対してはかなり無頓着だったようで（巻三「僧巨然蕭翼賺蘭亭図小絹画一幅」）、「陳以謂　集める所の書畫の册子、大幅を用て切りて紈扇と爲せる者多し。人因りて號して「書畫の創子手」と爲す」と、大幅の書画作品から必要な部分を切り抜いて、扇に仕立て直してしまったという（巻四「宋元小画冊二本計四十八幅」）。書画の小品を冊子や扇面に仕立てることが当時の蒐集家に好まれたとはいえ、いくらなんでもこれは作品の破壊行為であり、まさしく「書画の死刑執行人」という渾名にふさわしい人物だったのである。そして彼のコレクションは「後に皆な太興の季吏部に歸」したという。季氏の膨大なコレクションにはこのような代物も含まれていたのである。

康熙七年（一六六八）三月二日に、呉其貞は王廷賓なる人物に出会う。彼は、

公　諱は廷賓、字は師臣。三韓の生員より、旗に入りて出仕し、官は山東臬司に至り、揚州通判に降さる。人と爲りは剛毅正直にして、士庶として推重せざる無し。近ごろ閒住して事無く、時俗皆な古玩を尚ぶを見、亦た此に留心せんと欲す。然れども尚お未だ講究せざる也。

と、暇とそしておそらくは金をもてあましていたのであろう、ある日彼は巷で流行の古玩の蒐集を思い立つ。ところがこの道に関して全くの素人である彼は、呉其貞に向かってこう切り出した。

忽ち一日余に對して曰わく、「我れ大いに古玩を收めんと欲するも、爾に非ざれば我が爲に先を爭う能わず。肯んずれば則ち近日

得たる所の諸物、及び疇昔宅中にある者を將て、先ず我に讓らんことを望む。以後他處にて見る所の者も、仍りて之を浼圖すれば、其の値も一一命の如くせん。尊意は若何」と。余唯唯と曰う。

つまり王廷賓は、自らのコレクションをこれから形成するに当たって、呉其貞の鑑識眼と手腕に対して全幅の信頼を置き、彼の蒐集品は全て言い値で購入しようと申し出たのである。これに対し、呉其貞は即座に指南役を引き受け、「是に于いて未だ幾ばくならずして、一周にして得る所の物は皆な超等爲れば、遂に南北の鑒賞の大名を成す」と、彼の尽力により、王廷賓は早くも一年後には中国屈指のコレクターという盛名を博するようになったという。自らの力量に対する呉其貞の並々ならぬ自信のほどを読みとることができる。この王廷賓のやり方について、呉其貞は些か皮肉混じりに「公の作用は捷徑と謂う可き者ならん矣」とコメントしているが、ここでの彼らの関係は、もはや単なる雇い主と仲介業者という域を超え、ほとんど主客が転倒してしまっているかの観を呈している。[5]

ともあれ呉其貞は、これほどの好条件を提示してくれた王廷賓のために、以後ずっと作品収集に精を出すようになる。依頼を受けた四日後には「此の圖、通判王公の爲に、揚州の親友　詹用時の手より得たり」と、早速仕事にかかっており（巻五「張子政柳燕図絹画一小幅」）、さきに引いた黄公望《富春山居図》残巻も王廷賓に譲り渡されていることが、彼の記した題跋から判明している。[6]そして『書画記』巻六の末尾から二番目、康熙一六年（一六七七）一一月晦日の記事に、彼のために画冊を編纂していたことが語られており、「傷ましき哉、冊　未だ成らざるに公　先に逝けり」と、王廷賓が世を去るまで両者の関係は続いていた（巻六「馬遠琴鶴図絹画一小幅」）。

王廷賓の蒐集に一役買っていた人物に張黄美がいた。彼は、諱は鏐、揚州の人で、

黄美は裱褙を善くし、幼きより通判王公の爲に書畫を裝潢し、目力は日に隆んなり。近日都門に遊藝し、大司農梁公に遇いて愛せらるるを得、便ち佳士と爲る（巻五「趙松雪写生水草鴛鴦図紙画一小幅」）。

とあるように、書画の表装を行う専門業者であり、職業柄、書画の鑑賞にも通じていた。彼もまた、呉其貞と同じく書画

の買い付けを請け負い、「三圖を揚州通判の王公の齋頭に觀る。近日張黄美をして京口の張卽之の手より買わ使めたるに係る」と、この外にもたびたびその名が登場する。[7]

張黄美は、これとは別に、さきに北京において知遇を得たという「大司農梁公」のためにも書画を集めていた（巻六「盛子昭秋林漁隱図絹画一巻」）。梁公とは、真定の人、梁清標のこと。崇禎一六年（一六四三）の進士だが、李自成・清朝に相次いで鞍替えして順調に官歴を重ね、康熙九年（一六七〇）には戸部尚書、すなわち大司農に調された。一方で彼は、詩文をよくする傍ら、法書・名画の蒐集量は天下に甲たりと称されたコレクターでもあった。自らも小楷を得意とした彼は、《秋碧堂法帖》を刻したという。[8]

このほかにも『書画記』には、張黄美と同じく表装の名手で、宋元の絵画について優れた鑑識眼を称された蘇州の顧東之・千一父子や、陶磁器の倣製も手がけていた蘇州の王子慎、多くの書画を有していた嘉興の「老裱褙」岳子宜など、[9]コレクターとしても活躍する職人たちが登場する。明末の蘇州は、書画の保存と鑑賞に密接に関わる表装の最先端地域でもあり、当時から既に「国手」と称された湯杰・強百川などの名人を輩出し、王世貞らに推重されたという（周嘉冑『装潢志』）。彼らをはじめ、明末の文人たちに愛好された「玩具」を作る職人たちの中には、本来「賤工」の身でありながら士大夫と同等の礼を持って遇された者があったと伝えられる（張岱『陶庵夢憶』巻五「諸工」）。そして清の時代に入ると、書画の収蔵のみならず、コレクター間の仲介にも乗り出すなど、単なるパトロンと庇護者という関係から一歩進んで、独自の活動を始めるようになっていたのである。[10]

① 楊仁愷は、現存する法書のうち、帰希之の鑑蔵印が捺されているものには贋物が極めて少なく、彼の鑑識眼は非常に優れたものであった、と述べている。前掲第四章註①楊仁愷著書二一―二二頁。

② 戊辰は壬戌の誤り。『明清進士題名碑録索引』によれば、季寓庸の名は、明の天啓二年壬戌科、第三甲二八二名に記される。

③ 以上の引用部分は、いずれも『書画記』巻四「黄筌寒菊幽禽図絹画一幅」

④ 『書画記』巻四「黄筌寒菊幽禽図絹画一幅」。『書画記』巻四のこの部分は、日付や記述が錯綜しており、前後の記事の順序が入れ替わってしまった可能性がある。

⑤ 以上の引用部分は、いずれも『書画記』巻五「胡廷輝金碧山水図絹画一大幅」

⑥ 『中国古代書画図目』一一（文物出版社、一九九三年）一八頁に、康熙乙酉（四四年・一七〇五）の年記を持つ王廷賓跋文の図版を載せる。釈文については、前掲第一章註④邵彦校点本の附録を参照。

⑦ 『書画記』巻五「劉松年秋江掛帆図絹画一小幅」。ちなみに、ここで登場した張即之は張則之とも記され、張覲宸から続くこの家は、この頃には呉其貞らの得意先となっていた（『書画記』巻五「唐人郭熙平安捧誦帖」）。

⑧ 『畿輔通志』巻七二「名臣」真定府・梁章鉅『吉安室書録』巻三。

なお、まとまった伝記史料の乏しい梁清標の事跡と、彼の鑑蔵印を有する現存の法書・名画、計二八九点のリストをまとめた労作、Sherman E. Lee and Wai-kam Ho, "The Nature and Significance of the Collection of Liang Ch'ing-piao",『中央研究院国際漢学会議論文集』芸術史組（一九八一年）がある。参照されたい。

⑨ 以上順に『書画記』巻六「李伯時三賢図紙画一巻」・同書巻五「蘇漢臣撃楽図絹画鏡面一頁」・同書巻六「銭舜挙戯嬰図紙画一巻」

⑩ かかる現象につき楊仁愷は、「書画の中間商」たちが「一個の新興市民階層」を形成していく過程、と捉えている。前掲第四章註①楊仁愷著書二三頁。

第六章　芸術市場における「南高北低」の終焉

順治年間末頃から康熙年間にかけて、江南における書画骨董の流通には次第に変化の兆しが現れ始める。順治一七年（一六六〇）四月一一日の記事には、北京の王際之という人物が現れる。それによると彼は、さきの張黄美らと同じくまたもや表装の名手であった人物である。呉其貞にいわせればまだまだ精進の余地はあるものの、職業柄、書画の真贋を見抜く確かな目を持っていた彼は、蘇州に拠点を設け、江南に流通する書画骨董を大量に購入し、北京に持ち去る仕事にも携わっていた。

以上の書畫九十八則、吳門に在りて北京の王際之の寓に觀る。嘉興の高・李・姚・曹の四家に係る。夫れ四家は收藏すること前後已に百年に及ぶ。今一旦にして際之に隨いて北に去る。豈に地運の然ら使むるところならん耶（巻四「張樗寮楷書杜詩一首」）。

ここに挙げられた嘉興の四家は、いずれも当地の「望族」として著名な一族であり（潘光旦『明清両代嘉興的望族』）、書画骨董の収蔵にかけて、明末には中心的な役割を担っていた。ところが、乙酉（一六四五）の清軍侵攻と薙髪令に伴う争

乱によって嘉興は壊滅的打撃を被り、前後百年に亘って蓄積された諸家のコレクションはその多くが散逸した（姜紹書『韻石斎筆談』巻下「項墨林収藏」）。こうした中、とりわけこの王際之は、嘉興を書画骨董の主要な供給源としていたようで、『書画記』の別の箇所の記事とあわせ（巻四「黄大癡遊騎図小絹画一幅」）、都合一〇〇点以上の作品が、彼の手によって嘉興から北京に運び去られていったことになる。楊仁愷によれば、彼もまた張黄美と同じく、梁清標をはじめとする北京在住の賞鑑家に協力して、彼らのコレクション形成に深く関わっていたという。[1]

また、荘冏生のように、北京での蒐集品を江南に持参する者もいた。

> 此れ荘淡庵先生の呉門の園上に觀る。先生、諱は冏生、字は玉聰、武進の人、應會先生の仲子也。丁亥の進士に登る。臨池丹青に長じ、古玩を雅好す。家に收藏多く、大都は舊内より得たる者なり（巻三「董北苑風雨帰荘図大絹画一幅」）。

彼の父応会は明末の進士で、清の入関後にいち早く帰参し、江西方面での南明勢力の掃討に戦功のあった人物。子の冏生は康熙帝にその画才を愛されたという（『大清一統志』巻六一「常州府」二「人物」）。明の宮中に所蔵されていた大量の書画作品が、李自成軍の撤退に伴う混乱によって散逸したことは曹溶の目撃談に述べられ（郁邦慶『郁氏書画題跋記』汪森序）、南明の弘光政権が崩壊した際の南京でも同様の事態が起こったという（李天根『爝火録』五月十一日條）。荘氏もまた、下賜品の他にも、こうした理由で流出した作品を入手し、自らのコレクションを増やしたのであろう。康熙二年（一六六三）五月二八日の記事には、「以上の十七種、常州の翰林　荘淡庵の家に觀る。近日都門より帶來せる者に係る」とあるように（巻四「朱文公二帖合為一巻」）、この頃から北京における書画の取引は徐々に活発化してきており、次第に重要性を増しつつあったことが窺える。

明末清初の混乱に乗じて、これまで江南の後塵を拝してきた淮水以北においても、新興コレクターたちが陸続と登場してきたことは、すでに傅申によって、様々な史料を基にその見取り図が示されている。[2]「北方鑑蔵家」と総称される彼ら新興コレクターの内、呉其貞と関わりを持った主要人物は、王鏞および卞永誉である。

王鏞、字は仲和。呉其貞は、順治九年（一六五二）一〇月二八日に彼のもとを訪れ、一族の所蔵にかかる書画骨董の数々を閲覧し、こう書き記している。

此の五圖、蘇城に在りて、前金衢道　王仲和先生の寓に觀る。王は河南の人、覺斯先生の胞弟也。篤く古玩を好み、得る所の名器多きこと甚だし。人の借觀する者有らば、則ち盡く堂上に出布し、人をして接應に暇あらざら令む（巻三「高房山瀟湘烟雨図絹画一幅」）。

覚斯は王鐸の字、言うまでもなく明末清初を代表する書家である。孟津の王氏兄弟は、いずれも南明政権をいち早く見限って清に帰順した「貳臣」であり、機に乗じて伝世の名品の数々を集め、大コレクターに成り上がったことで知られる。

卞永誉、字は令之、清初を代表する書画の賞鑒家で、古今の文献を博捜して編纂した大部の書画録、『式古堂書画彙考』六〇巻を著した人物。康熙一四年（一六七五）八月三日に、呉其貞は杭州において、彼が所有する膨大な数のコレクションを閲覧し、こう記している。

以上の三十圖、册中の最も尤れたる者爲りて、其の餘も皆な唐・宋・元人の眞跡なり。此の册、杭城に在りて、長男　振啓と同に卞公の行館に於いて觀る。公　諱は永譽、字は令之、三韓の人。人と爲り率眞にして、性は古玩を好み、目力は人に過ぐ。數日中鑒賞する物無くんば、神情失える所有るが如く、譬うるに飲を嗜む者の酒無しと爲せるがごとき耳、其の篤好は此の如し。時に乙卯八月三日。次の日復た自ら攜えて余の家に至り、翫賞すること終朝、故に其の尤なる者を抜き、畧や之れが記を爲す（巻六「唐宋元小画図冊子四本計一百頁」）。

卞永誉は、さきの王廷賓と同じく三韓出身の人物であり、あるいは彼から呉其貞の評判が伝わったのかもしれない。当時既に卞永誉は、呉其貞が全てを記録しきれぬほど多数の書画を擁しており、以後両者の交際は親密の度を深め、同年一二月五日には蘇州において再会（巻六「宋人維摩説法図題跋一本」）、さらにその三日後には、十年ぶりに再会した蘇州有数の書画商人、帰希之のもとを共に訪問している（巻六「文与可古木図絹画一幅」）。呉其貞の晩年に、両者は非常に親しい関

係になっており、おそらく彼の蒐集にも一役買っていたであろうことが窺える。

一方で、さきに嘉興の事例にも見たように、江南の各都市における書画骨董の流通は次第に下火になっていったようであり、そのことは、康熙六年（一六六七）五月一三日に呉其貞が故郷の徽州に帰省した際、

憶うに余　昔し溪南に到れば、古玩を觀ること山陰道に登るが如く、應接に暇あらず。今來兩日捜尋するも、四畳を見るを得たるのみ。亡事なるを知る可し（巻五「僧子庭松石図絹画一幅」）。

という述懐にも現れている。この頃すでに徽州における書画の取引は、明末の盛況に比べて著しい凋落ぶりを示していたのである。そしてこれは江南の他の都市においても、程度の差こそあれ全般的に見られた趨勢でもあった。

一方、北京においては、楊仁愷が述べるように、康熙年間に宣武門内の慈仁寺が、そして乾隆年間には瑠璃廠の骨董街が、書画取引の中心地として浮上しはじめる。さらに、乾隆帝自らによる積極的な蒐集活動が開始され、高士奇・梁清標・宋犖・孫承沢・卞永誉・安岐らのコレクションは、陸続として清の内府に収められていき、『石渠宝笈』や『欽定西清硯譜』などに体系づけられていくこととなる。③

① 前掲第四章註①楊仁愷著書二三頁。江南各地のコレクションが、蘇州を経由して北京に持ち去られる動きについては、ほかにも順治一六年（一六五九）一二月二〇日の記事に、宋拓の《淳化閣帖》が「已に北人の爲に售去せらる」と述べられている（『書画記』巻四「李伯時九歌図大紙画一巻」）。

② 傅申「王鐸与清初北方鑒蔵家」（『朶雲』一九九一年第一期）。とりわけ七五頁の「十六世紀及十七世紀前期収蔵家籍貫図」・「十七世紀中期収蔵家籍貫図」を参照されたい。

③ 前掲第四章註①楊仁愷著書二四頁を参照のこと。

おわりに

明末清初の前後約一〇〇年にわたって、書画骨董の蒐集と流通は、江南の諸都市在住の「民間」のコレクターたちによって、史上空前の活況を呈した。清代の前期には、商人や職人、さらには大官名族の使用人に至るまで、書画骨董の世界

において従来「無名」の存在であった人々が、諸名士の間に立ち混じってその力量を存分に発揮し、彼らのコレクションを形成する上で必要不可欠の存在になっていった。そして彼らの中には、一流の文人と同等に遇され、呉其貞のように質の高い書画録を書き残すほどの人物までが現れたのである。しかし、かかる江南の質量の両面における圧倒的優位は、康熙年間を境として徐々に崩れ始め、乾隆年間に至り、宮廷が再び書画骨董の蒐集と鑑賞の中心に返り咲くことによって、「南北」の格差は是正された。これに伴い、江南の書画骨董の取引は下火となっていき、商人たちが活躍する余地も、以前に比べ減少していったのである。『書画記』に見る呉其貞が生きた時代は、書画に携わる商人・職人など、この世界において従来一段低く見られていた名も無き人々が、最も脚光を浴び、生き生きと活躍した時代であったと言えるであろう。

（総合地球環境学研究所非常勤研究員　　）

Third, in the eleventh and twelfth centuries, when people attempted to argue for or against customs, or prove their legitimacy in lawsuits, disputes, warfare, or land-management, inquiries and examinations were seldom the first choice. In court, the judgments of God and the results of duels could replace them. Accords between disputants easily modified customs without any consultation of the collective memory stock. Victors in war were expected to decide on the abolition or modification of customs. Finally, in order to maintain or revive customs land-managing monks often resorted to fortification of the domains and demonstrative practices on the domain instead of consulting the memories of their peasants.

On the Merchants of Huizhou and the Art Market during the Late Ming and the Early Qing Period: An Analysis Based on Wu Qizhen's *Shu-hua-ji*

by

INOUE Mitsuyuki

During the late Ming and the early Qing period, collection and appreciation of paintings, calligraphy and antiques reached unprecedented levels of activity in the history of China, and simultaneously commercialization of works art progressed, especially in the Jiangnan region. Based on the descriptions of paintings and calligraphy in the *Shu-hua-ji* of Wu Qizhen, this paper clarifies the activities of Huizhou merchants who were responsible for the circulation of objects of art during the period and also considers the trends in the art market in China.

Huizhou was one of the most important markets for paintings, calligraphy and antiques in the late Ming period. Huizhou merchants including Wu Qizhen and his family were diligent in dealing art objects systematically across the Jiangnan region, employing connections with those of the same family name and the employees commissioned to deal as a base for their activities.

After the early Qing period, Wu Qizhen traveled among the main cities of the Jiangnan region and associated widely with the collectors and merchants who lived in the region and who treated him as a leading connoisseur of their collections or as an instructor. During this period, there appeared merchants and craftsmen with

special skills who could associate on equal terms with a man of letters, and their status was enhanced at the same time.

However, when Beijing began to re-surface as the center of activities involving collection and appreciation of paintings, calligraphy and antiques, the predominance of the Jiangnan region declined and the activities of merchants also tended toward a close.

Negotiations for Treaty Revisions in the Period of Minister for Foreign Affairs Aoki Shuzo: The Planning Process and the International Environment

by

OISHI Kazuo

The decision of the cabinet meeting of December 10, 1889 to take corrective measures following Okuma's negotiations for treaty revision, was to record two conflicting opinions: the first consisted of the proposal of Kowashi Inoue, the chief of the Legislation Bureau, and Miyoji Ito, the chief secretary of the Privy Council, insisting on rejection of the ratification of the new treaties, which had already been signed; and the second of Kaoru Inoue, minister for agriculture and commerce, and Shuzo Aoki, the vice-minister for foreign affairs, which was the main position of the cabinet, demanded modifications in the new treaties. Anxious about the possibility of intervention by Germany or other Treaty Powers while the Japanese government was weakened and in disunity and fearing that a majority in the first parliament would push the government to take some dangerous step such as a denunciation of the existing treaties, the British government, on the other hand, decided to abandon demands for the appointment of foreign adjudicators and to take preemptive action by submitting new counter proposals. The Yamagata administration, deprived by the English government proposals of shifting responsibility for the delay of treaty revisions and unable to start negotiations itself out of consideration of the advocates of equal treaties, faced a dilemma. In the end, Aoki, the Minister of Foreign Affairs, seized the initiative and started full negotiations, and the Yamagata administration resigned at the close of the first